

平成 23 年 11 月 23 日

市原市牛久石奈坂

# 石奈坂古墳群（1号墳）

## 遺跡見学会資料



市原市教育委員会 生涯学習部

市原市埋蔵文化財調査センター

# 石奈坂 1 号墳の調査と出土した銅鏡について

## 調査にいたる経緯

石奈坂 1 号墳及び石奈坂遺跡の発掘調査は、(仮称)南部保健福祉センター建設に先行して、文化財保護法に基づき実施しているものです。

具体的には、遺跡内に所在する石奈坂 1 号墳の一部分について、道路工事が必要となったことから、記録保存の措置を講じているものです。

遺跡名 : 石奈坂遺跡・石奈坂古墳群  
(市埋蔵文化財調査センター調査コード セ 4 8 0 )  
所在地 : 市原市牛久字石奈坂  
調査期間 : 平成 23 年 7 月 11 日 ~ 平成 23 年 12 月 28 日  
調査面積 : 7 9 0 m<sup>2</sup> (石奈坂古墳の一部分)  
調査担当者 : 北見一弘主任 (学芸員)

## 石奈坂遺跡の範囲と調査

当遺跡は、『市原市埋蔵文化財分布地図 南部編』や『千葉県の歴史 資料編 考古 2 (弥生・古墳時代)』などで、「石奈坂遺跡」として紹介されてきました。しかし、調査地点の小字名が「石奈坂」であることと、遺跡名は、字名などによって付けているこれまでの慣例に従い、今回の調査から「石奈坂遺跡」としています。

石奈坂遺跡の範囲は石奈坂古墳群(大小 1 0 基の古墳)の範囲がこれにあたります。遺跡の南側は養老川に面し、北側は南総支所や小湊鉄道に接していません。上総牛久駅の西側約 300m に残る小高い台地の縁辺に位置しています。

石奈坂遺跡としての発掘調査は初めてのことですが、明治十五年の地形図(迅速図)をみると、石奈坂遺跡の営まれた台地は、現在の千葉県立市原高等学校の方まで続いていたことがわかります。県立市原高等学校の敷地周辺では、かつて、昭和 43 年から 47 年まで、校庭拡張工事に伴う発掘調査が行われていて、1 基の円墳と、2 基の方墳が明らかとなっています。また、先にも掲げた『分布地図』には、南総公民館南の三島神社境内地に遺る小円墳を含めて 5 基の古墳の所在が示されていますから、もし、石奈坂古墳群と牛久古墳群とが、その昔、一続きの台地上に広がっていたものだとすると、少なくとも、1 8 基以上からなる古墳群であったこととなります。(図 1 遺跡分布図・図 2 迅速図)

中でも、今回発掘調査を実施した石奈坂 1 号墳は、古墳群中でも規模が最も大きく、また、台地西側先端に築かれていますから、本古墳群を代表する首長

墓であったと考えることができます。(表1 石奈坂古墳群の規模)

表1 石奈坂古墳群の規模

古墳名	墳形	墳丘規模	墳丘高	遺跡 NO.	備考
1号墳	円墳	径3.3m	高さ3.3m	134-	
2号墳	円墳	径2.0m	高さ2m	134-	調査歴無し
3号墳	円墳	径2.0m	高さ2m	134-	同上
4号墳	円墳	径12.7m	高さ1m	134-	同上
5号墳	円墳	径2.0m	高さ2m	134-	同上
6号墳	円墳	径1.4m	高さ1.5m	134-	同上
7号墳	円墳	径5.2m	高さ1.2m	134-	同上
8号墳	円墳	径1.2m	高さ1.5m	134-	同上
9号墳	円墳	11.9m	高さ1.0m	134-	同上
10号墳	円墳	5m	高さ1.0m	134-	同上

## 石奈坂1号墳の規模と形状

石奈坂1号墳は、周溝の内側で直径33m程度の円墳と考えられます。

調査開始時点で、墳長部の標高は40.20mほどありました。また、半径5mほどの範囲は、上面が平らな状態で、築造時の形状を比較的によく残しているものと考えられました。古墳を築く時点での地表面は、標高37m前後のところだと考えられますから、3.2~3.3mも土を盛上げてこの古墳が造られたことがわかります。(図3 墳丘測量図)

## 主体部Aの規模・構造・位置

今回、銅鏡が発見された埋葬施設は、1号墳墳頂平坦面でもやや北西側に偏った位置に作られていました(主体部A)。これとは別に、墳丘中央部にやや規模の大きな埋葬施設(主体部B)が発見されています。主体部Bも、主体部Aとほぼ同じ向きに造られています。土壌規模が大きいことや中心部に造られていることから、石奈坂1号墳の最初の被葬者は、主体部Bの棺に葬られた首長の方だったとみられます。主体部Aは、長さ約3.0m、幅約0.7m、深さ約0.1mの浅く細長い溝状の土壌で、ここに木製の棺(ひつぎ)が直接納められていたものと考えられます(木棺直葬)。埋葬施設の発見された深さは、調査時の地表面から、約0.60mでした。また、棺の置かれている向きは、座標北に対して東に約54度振れています。ですから、この棺に埋葬された首長は頭を北東の向きにしていたこととなります。(図4 主体部平面図)

## 主体部Aの副葬品について

主体部Aからは、銅鏡（同向式神獸鏡）1面、勾玉1点、管玉1点、鉄製大刀2振、鉄鏃12本（+）、鎌刃1点、刀子とみられる鉄製品1点などが出土しています。

銅鏡は、同向式神獸鏡です。棺の中央やや北寄りに鏡面を下にして出土しました。完形品で、直径16.8cm程度のものです。紋様面に勾玉と管玉が乗っていました。このことから、鏡の出土位置あたりに、被葬者の胸部があったものと推測することができます。

鉄製の大刀二振りとは、それぞれ、頭部右脇と腹部左脇とに、刃が内側を向くように副葬されていました。頭部側の大刀がやや短く、刀身87cm（刃渡70.5cm）の直刀です。また、腹部脇の大刀は、刀身92.5cm（刃渡75.0cm）とやや長いものでした。どちらも拵えは遺っていませんでした。

鉄鏃には、鏡側にやや纏まって出土したものと、北側に離れて出土したものとがあります。想定される被葬者の位置との関係では、矢柄が頭部や胸部に被さることになりますが、頭部左脇に弓と共に副葬されていた矢が、被葬者の腐食に伴って棺中央に転がり込んできたものと考えられます。

一方、やや北側離れた位置に発見された鉄鏃の中には、無茎鏃が見られ注目されます。実用的意味合いよりも、儀礼的意味合いが感じられます。頭部北側には、他にも副葬品が納められていたことですが、腐食する材質だったために、今日までは伝わらなかったものと、考えることができるでしょう。

被葬者の足もとに、鎌刃が1点出土しました。鎌は農耕と開拓の象徴です。

副葬品を大局的に眺めてみると、三種の神器に繋がる、「鏡・勾玉・剣」を揃えていることから、この地域の首長としての正統性を強調するとともに、大刀や弓矢から、武力に長けて大和政権に貢献した人であったことが窺われます。また、足下の鎌は、この地域を農耕によって開拓・支配した人であった側面を伺わせてもいます。

## 主体部Bについて

主体部Bは、墳丘のほぼ中央に位置し、長さ約4.8m、幅約1.0m、深さ約0.15mの浅く細長い土壇で、主体部Aとほぼ同様な方位でつくられています。主体部Aと同様に木棺直葬とみられます。埋葬施設の発見された深さは、調査時の地表面から、約0.65mでした。

出土遺物は、鉄剣2本、内一本に装着されたとみられる金銅製三輪玉2点、鉄製工具類2点、鉄鏃（長茎鏃）本数未確認、砥石1点、管玉1点が出土している（調査中のため内容・数量は変動の余地あり）。

## 出土した銅鏡について



鏡式 : 同向式神獸鏡 ( B 式 )

鏡径 : 約 16.8 c m

特徴等 : 外区 鋸齒紋帯の内側に三列からなる複線波紋帯が廻り、更に、その内側に櫛齒紋による三つの圈帯が施紋されています。

内区 画紋帯や銘文帯などは無く、主紋区のみとなっています。

主紋は、同向式神獸鏡 ( 車崎正彦氏教示 ) です。現在は、繊維質物の調査などを行うために、紋様面のクリーニングを行っていません。従って、詳細は不明です。

鈕 鈕座の上に鈕を乗せています。紐通しの穴は、断面形が略長方形となっています。



主体部 B 三輪玉出土状況

市原市埋蔵文化財調査センター

〒290-0011 市原市能満 1489

41-9000

ホームページアドレス

<http://www.city.ichihara.chiba.jp/~maibun/index.htm>